

婁爾行と中国会計研究の歩み

Dr. Lou Er-Ying and the History of Accounting Research in China

石川純治

Junji Ishikawa

I はじめに

II 中国の会計研究史と婁教授

III 婁 爾行:「私の歩んだ道」

補遺 I 上海学術交流帰国後の報告会資料

補遺 II 婁先生との対談記（4月1日）



I はじめに

本稿は婁爾行著『会計審計理論探索 (Inquiries in Accounting and Auditing Theory) 』(立信会計出版社、1992年)の「あとがき」に相当する部分を翻訳し紹介したものである。「あとがき」といっても、40ページ(383-423頁)にのぼる分量で、それはひとりの大学人の「自叙伝」あるいは「個人史」といったほうが適切かもしれない。生身の個人史をとおした中国会計研究史上の貴重な文献としてここに紹介する。

さて、1933年に上海財経大学の前身である上海商学院に入学して以来およそ60年間、中国会計学会の創設者のひとりであり、学会の重鎮である婁爾行が「歩んだ道」はけっして平坦なものではなかった。それどころか、激動の中国史のなかで、ひとりの会計学者・教育者が翻弄され悩みながら生きていくその姿は、日本のとりわけ筆者の年代の研究者には決して経験されることのないものだけに、とりわけ感慨深いものがある。

参考までにいえば、ある意味で共通した感慨をいづく日本の会計学者は木村和三郎その人である。それは、木村の日記の抜粋である『俱會一處』(昭和49年)の次のあとがきに凝

縮されている。すなわち、「第2次大戦下の激動期にあつて、『商大事件』(1943年)に連座され、大学を追われた真摯な学者が、自由を希求してやむことなく、真理の探究に倦むことなく辿った道程の記録から、『生きる』ことの何たるかを、身を以て教示されているのを知る」(編集世話人のあとがきより)と。

あえていえば、ともに大学を一時期追われ仕事を剥奪されたふたりの学者に共通するのは、「真摯な」学者ということであり、「自由を希求」するということであろうか。制度的な「自由」が一応保証され、それが当たり前になっている今日、またそういう「自由」な時代であるがゆえに、今日の研究者にとってあらためて考えさせられるテーマであるといえる。

II 中国の会計研究史と婁教授

ここで、中国における会計研究の歩みと、そこにおける婁教授の位置について若干ふれておきたい。R.F. Carroll and F. Liu, "Accounting research in China" (J. Blake & S. Gao edited, *Perspectives on Accounting and Finance in China*, Routledge, 1995, Ch.13 所収)によれば、中国の会計研究は新中国が成立(1949年)して以来、およそ次の3つの段階に分けられるという。

1) 第1段階：1949年から文化大革命が始まった1966年まで

ソ連の会計理論および方法の全面的導入。会計理論および方法は中央集権的計画経済に奉仕。反資本主義制度の影響：それまでのブルジョア階級に奉仕する会計理論および方法の批判。

2) 第2段階：1967年から1977年の10年間

政治闘争と混乱期。会計研究の空白期。

3) 第3段階：1978年から現在

会計研究の役割に関する劇的変化。会計研究の目的：①より科学的に基礎づけられること、②中国経済システムに適合する会計モデルの確立、③中国のより開かれた市場経済に適合する会計モデルの展開。

第1段階と第3段階のもっとも大きな違いをひとことでいえば、会計研究における「イデオロギーから科学へ」ということになろう。さらに、第3段階でもとりわけ1980年代後半に会計研究は純理論的研究から「会計基準」、「物価変動会計」、「資産評価」、「利益認識測定」といった応用研究へとシフトし、そのなかで大きな役割を演じたのが1980年に設立された中国会計学会であった。「私の歩んだ道」のなかでも述べられているように、中国会計学会は1987年にいくつかの研究グループを設けたが、そのなかでもっとも影響力があったのが婁教授を中心とするいわゆる「会計理論・基準研究グループ」であった。

いずれにしても、こうした中国会計研究の歴史からすると、婁教授はそのすべての段階に係わっており、そればかりか新中国が成立する以前の1933年に上海商学院の学生になられているので、その人生すべてがいわば中国会計研究の歴史でもあるといえる。婁爾行というひとりの会計研究者の「歩んだ道」をとおして、中国会計研究の歴史の「道程」をかいま見ることができるし、また逆に中国会計研究の歴史の大まかをおさえたいうえで「歩

んだ道」を読むとよりいっそう興味深いものとなる。

なお、婁爾行の「歩んだ道」を紹介するきっかけになったのは、筆者が大阪・上海学術交流で 1997 年 4 月 1 日に復旦大学管理学院の張文賢会計学部長とお目にかかったことに由来する。かねてから婁教授にお目にかかりたいと思っていたことを述べると、張教授はさっそく婁教授の自宅に電話して下さった。婁教授はご高齢でかならずしも健康にすぐれない身であるにもかかわらず会っていただけることになり、復旦大学の焦必方副教授とともに上海の中心にある高層マンションのご自宅で会うことができた。そして、筆者にいただいたのが本稿が収められている『会計審計理論探索』であったわけである。

最後に、筆者とともに婁教授に会った焦副教授は「私の歩んだ道」の日本語訳を快く引き受けていただいた。また、「私の歩んだ道」の日本語訳にあたり本学部のテキ教授にもご協力いただいた。ここに張文賢、焦必方、テキの三教授に厚く感謝申し上げたい。

(1998 年 5 月 18 日)



Ⅲ 婁 爾行:「私の歩んだ道」

- 1 会計専攻を選ぶ
- 2 企業管理の分野に踏み入れる
- 3 Paton 教授に師事する
- 4 講壇に立つ
- 5 工業会計を教える

- 6 脇役を演じる
- 7 本業に復帰する
- 8 国際論壇に登る
- 9 授業改革を断行する

1 会計専攻を選ぶ

1933年の夏、私は高校を卒業して国立上海商学院（以下、「上商」と略称）に入学した。上商の前身は中央大学商学院であった。当時の私の夢は、将来は企業を経営して経済力のある実業家になるというもので、大学の教授という考えは全くなかった。

今世紀の30年代の初め頃、上商は全国の商学院の中でも一番いい商学院だといわれた。しかしその規模はそれほど大きくなかった。1933年の秋に私が入学したときは、全学院の教授は20数名程度で、学生数も200人位であった。ちなみに、上商を前身とする現在の上海财经大学の教員は700名以上であり、学生数も6,200人位である。学校の規模は小さかったが、その教育水準は高かった。

当時の上商は主として4年制の大学本科生を育てていた。学生は入学後の2年間に学部の違いに関わらず全学共通必修科目を履修し、3年次より各学部に分かれて勉強した。当時、上商には4つの学部があった。会計学、銀行学、工商管理学そして国際貿易である。現在の学部は規模が大きく、内部にいくつかの専攻を有している点でその構成を異にしている。

最初の2年間で学ぶ全学共通必修科目の中で、1年次に「会計綱要」があった。これは会計学の入門科目であり、現在の「基礎会計」あるいは「会計原理」のような科目である。2年次には会計学の授業もあり、これは現在、西洋会計学会で言うところの「中級会計」のような科目である。これにより3年次に会計学を専攻しない学生でも、会計学の知識はその広さ、深さにおいて現在の学生よりも優っていた。

私は上商で2年間の学習を終えた後、躊躇せずに会計学部に入った。会計学を専攻するにあたってはいくつかの誘因があった。まず第1に、その当時、会計学部が一番人気が高く学生数も一番多かった。また、会計学部の学生は卒業後の就職がしやすかった。第2に、最初の2年間の勉強を通じて会計学の理解を深めることができた。会計学は内容が充実しており、実学的なものも多く、学びやすい分野だと私は考えた。第3に、安紹芸教授の学生になりたかった。安先生は諸先生方の中でも厳しいことで有名だった。当時、私はまだ若かったこともあり、「厳しい先生の下でこそいい人材が育つ」ということは分かっていなかった。しかし、安先生の学生になれば多くのことを吸収できるだろうと考えていた。

私が上商の学生になった年が、ちょうど安先生が第1回目の上商会計学部長になった頃であった。1年次、2年次の「会計綱要」と「会計学」の授業はいずれも安先生の講義によるものだった。また、3年次の「原価会計」と4年次の「監査論」も安先生の講義であった。また、私の卒業論文の指導教授も安先生であった。安先生は私の4年間の大学での勉強において常に指導教授であった。名師から直接に教授してもらえたことは私のこのうえない幸せであった。4年間、安先生からご指導を頂いて、その後会計学を深めていくのに十分な土台を築くことができた。

私が在学していた頃の上商の会計学部は、安先生の主張により、主な専門科目のほとんど

どは有名な英文教科書を用いて行っていた。1年次の英文講義は安先生の編集による『会計綱要』を用いて行われた。2年次の会計学と3年次の高等会計（上級会計）はすべて著名な **Roy B. Kester** の教科書シリーズを使った。すなわち、2年次と3年次の教科書はそれぞれ **Roy B. Kester** 会計学教科書シリーズの第1冊と第2冊であった。3年次の原価会計で用いたのは **W.B. Lawrence** の『原価会計』で、4年次の監査論で用いたのは名著 **R.H. Montgomery** の『監査』であった。大学学部の4年間に英文の原版の教科書を使って勉強するのは相当な難しさと深さがあった。安先生の授業の特徴は週に1章であるが、新しい内容を勉強する前に独学での学習を要求された。

英文原書を読むのには読解力が極めて重要である。この面において私は得意であった。これは、高校時代に英語の訓練を受けたからであった。高校時代の英語は、大学はもとより後のアメリカ留学、会計教育やその研究にも非常に役立った。上商の会計教育は学生の問題解答能力の育成を重視した。会計の勉強はある程度の理論的な知識の蓄積が必要であるが、一方で実地的な業務を行う技能の練習も必要である。こうした練習を重視するのは会計学の特徴といえる。私の学生時代、会計学の学習には数多くの練習と宿題をこなすことが求められた。安先生の「原価会計」と「監査」の宿題の量は非常に多かった。中には科目ごとに1セットで、学習の進展に伴い半年かかって完成させるというものもあったが、私はその2科目の宿題を見事にやり遂げた。級友の中には時間の関係や内容の理解が困難なとき、やり終えた友人から答えを借りて書き写す者もいた。私たちは、そういった宿題を貸し出す人のことを「発行センター」と呼んでいた。私のクラスには発行センターが2つあったが、私もそのうちの一つであった。安先生は他の大学でも講義をされていたので、私の答案はその大学でも出回っていた。まったく困ったものであった。

1934年9月に2年生になった私は、全学の生徒と学生が出席する新学期の始業式に参加した。院長のスピーチの後、私は褒賞を受けた。突然のことで驚いたが、私は1年生の中で成績が一番良かったのだという。金色の褒賞と賞状をもらい、私は非常に感激した。その後も一生懸命学問に励み、1937年の卒業まで四連覇を成し遂げ、首席で卒業できた。

2 企業管理の分野に踏み入れる

上商を卒業するにあたり、私はアメリカへの留学を準備していた。安先生はアメリカのウィスコンシン大学の卒業生であったが、私は安先生の推薦で会計学の最高レベルの大学へ願書を提出した。希望校は、ミシガン大学、ウィスコンシン大学、ハーバード大学、ノースウエスト大学の4つだった。一番先にミシガン大学より入学許可通知が届いたので、早速海外留学の手続きをとった。当時、中米間には週1便の航空便が就航していたが、値段が高いため一般には船便が利用されていた。私はこの船便を利用して2週間という長旅の末、太平洋を渡り、1937年9月ミシガン大学に入学した。

アメリカ留学について、当時私はあまり詳しくなかった。私の留学の目的は、会計学の知識を一層深める一心にあった。ミシガン大学から先に入学許可通知を受け取ったため、即座にミシガン大学に決めた。その後他の3大学からも入学許可通知をもらったが、選択肢にはまったく入れなかった。今思えば、もし当時大学の状況などをよく調べていたらハーバード大学に決めていたかもしれないと思う。というのも、4大学の中ではハーバードが一番人気だったからである。

私が入学したミシガン大学の企業管理大学院 (**School of Business Administration**) は、一般的には工商管理学院と翻訳されていたが、実質的には工商管理よりもかなり幅広いものであった。したがって、私はいつもビジネス・スクールと翻訳した。アメリカに着いた当初は分からないことが多く、先にきていた中国人留学生に学校の事情などを教えてもらったりした。ビジネス・スクールの修学年数は2年間で、必修単位数は60単位、学位は企業管理修士(MBA)である。しかし、人文大学院の経済学部の院生であれば修学年数は1年間で、24単位だけで卒業することができる。この場合、学位は文学修士となる。ここでは企業管理を勉強するのは時間もかかるし宿題も多いため、中国からの留学生で経済学を勉強する学生は数多くいたが、企業管理を専攻する学生は少数であった。また、この大学院にきている中国人留学生で卒業まで在籍する者は少なかった。仮にいても、卒業に2年半から3年以上を費やす者がほとんどであった。「どんな修士号でも帰国したら同じように聞こえる」、「最初の選択が間違ると、後は大変だよ」などといって、先輩留学生たちは企業管理を専攻しない方がいいと忠告してくれた。

アメリカ留学にあたって私の計画は2年間であった。ビジネス・スクールの修学年数はちょうど私の計画に見合うものであった。また、留学の目的は良いものをたくさん吸収したいということであった。私の知る限り、人文大学院の経済学部で開講される会計科目は内容も少なく浅いものであった。そのようなことも考慮して、私はビジネス・スクールの院生になることを決めた。私は **Waterman** 教授の指導の下、学習計画をたてた。彼は私の会計を中心とする学習計画に賛成してくれたが、2年間で60単位を取得することは安易なことではないといった。確かにアメリカの学生は一般に4学期に分けて各学期15単位ずつ取得する。しかし、アメリカに来たばかりの留学生にとってそれは無理に近い。教授は私に、第1、第2学期はそれぞれ12単位ずつ取得し、その上で夏休みに6単位を取得、合計30単位とするよう助言してくれた。そして、第2学年に進んでからは、アメリカの学生と同じように学期ごとに15単位取得するという。中国からきた留学生にとってこのような計画は厳しいものであるが、できるかどうかは個人の努力次第だ、と彼はいった。

深く考えずに企業管理の分野に足を踏み入れたことは、私にとって人生の大きな転換点となった。ミシガン大学の2年間は私の会計学に対する認識をより堅固に高めてくれた。私の視野は広がり、会計学を単純な技術としてではなく、経営管理の一翼を担うものとしてとらえることができるようになった。深く追求しなかった企業管理の分野についての理解がますます深まった。ミシガン大学はアメリカのビジネス・スクールのトップ・テンの中の一つであった。ハーバード大学ほどではなかったが、その知名度は高かった。これについてはミシガン大学入学後に次第に分かってきた。アメリカでは一般にMBAの学位を取得することは企業の管理層クラスを目指す人たちの必須のステップである。この点は文系修士学位と違うところである。MBAを取得すると就職もしやすく、その年収は一般の修士学位を取得した人よりも高い。

私が留学した30年代後半、アメリカの各ビジネス・スクールではケース・スタディの方法で授業が行われることが多かったが、ミシガン大学もその例外ではなかった。入学当初、私はケース・スタディの手法で行われる「マーケティング」と「工業管理」などの講義になかなかついていけなかった。何が難しかったかといえば、まずノートを取るのが困難だったことと、要点を自分なりに見いだすことができなかった。それでも1学期の終わ

頃にはずいぶん慣れてきた。会計学の授業については別段問題は感じなかった。というのも、上商での4年間で英文の宿題をたくさんこなしていたからである。

授業内容が新しく盛りたくさんで、レポートの量が多いというのがミシガン大学の特徴の一つである。だから私は土曜日の夜、日曜日あるいは休日のすべてをレポートに費やしていた。余暇というものはほとんどなかった。

ミシガン大学ビジネス・スクールにはレポートについての厳しい規定があった。たとえば、用紙は規定のサイズの白無地、手書きではなくタイプライター使用、上下左右の余白の指定からフォームの指定、表紙の装丁にいたるまですべて決められていた。私の初めてのレポートは手書きであったため、翌日には返却されてしまった。高校時代にタイプライターを習ったことはあったが、長い間使っていなかったものでほとんどできなくなっていた。レポートが返ってきた日、私はがっかりした。そこで、一緒に住んでいた張汝梅君とお金を出し合ってタイプライターを購入した。それから1週間一生懸命練習して、レポート提出についての技術的な問題はとりあえず解決した。

ミシガン大学の試験では解答用紙として青い表紙のノート (**bluebook**) が指定されていた。そこで学生たちは、試験のことを「ブルーノート」と呼んでいた。それを知らなかった私は、早合点して失笑を買った。

試験は **Honor System** をとっていた。これは試験時に試験監督者をおかず、学生はテキストや参考資料の持ち込みが許されていて試験場の出入りも自由に行えるというものである。試験範囲は広く、その難しさは一般的な持ち込み不可の試験の比ではない。朝8時から正午頃までの約半日の時間をかけて行われた。

私の上商の4年間で取得した単位は、すべてミシガン大学で認定してもらうことができた。ミシガン大学で学ぶものと上商で学んだものとのギャップに悩むようなことはなかった。これはすなわち、30年代中頃の上商の会計学水準は国際レベルに達していたといえることができる。これは安紹芸教授の功績によるところが大きい。安先生の指導方法は、その時代の数多くの著名な会計学の原書をテキストとして用いて英語でレポートを提出させるというものであった。

1937年の秋から1939年の夏までの2年間、私はミシガン大学で学んだ。1学期は4科目で12単位、2学期に14単位、夏休みに3科目6単位、合計32単位を最初の1年で取得した。これは中国からの留学生としては珍しいことだと、中国人留学生の仲間たちが皆でお祝いをしてくれた。その後、1939年6月の卒業までに16単位、12単位と合計60単位を取得し、MBAの学位も取得した。

3 Paton 教授に師事する

ミシガン大学ビジネス・スクールは特に専攻別に分けていなかった。しかし、私は主として会計学を選択した。2年間でビジネス・スクールが開講する会計学の5科目をすべて取得した。その5科目とは、**Corporate Accounts and Statements, Cost Accounting I, II, Accounting System, Public Accounting**、そして **Accounting Theory** であった。

それ以外に取得した主な科目は、マーケティング、財務管理、企業統計と工業管理などである。これに加えて、中国の大学では開講されていないような管理に関する新科目もある程度学習した。一例を挙げれば、**Time and Motion Study, Tabulating Machine Practice** 等

である。ミシガン大学で学んだ会計科目の中で、その後の会計研究にもっとも大きな影響を与えてくれたのは「原価会計」と「会計理論」である。

「原価会計」は **Prof. Herbert Taggart** が担当された。彼はこの分野の知識がとても豊富で実務経験もある。彼はよく自分の車に私たち学生を乗せて、昔働いていた工場や取引先の工場につれていっては、現場でコスト問題を討議、分析させた。このように、上商で学んだ原価会計を軸にして関連理論を学んでいった。帰国後、**1940** 年から原価会計を教える立場になったが、いつも学生から喜ばれた。これには上商での学習とミシガン大学で学んだ理論が大きく貢献している。私はその後、数年間にわたる講義を整理して『原価会計学』という本を書いた。この本は **1951** 年に上下2巻で出版された。この本が私の初めての著作となる。当時この本は教科書として多くの大学で使われた。しかし、その後の社会主義経済建設の波がわが国の各経済系大学にソ連の教科書導入を強いるようになった。「原価計算」は工業会計学の一部となり、各大学は「原価計算」を科目として開講することはなくなった。そうして次第にこの本は書店の店頭でも見かけなくなっていった。

ミシガン大学ではその名が広く知られた **Prof. W. A. Paton** のもとでも学んだ。「会計理論」は **Paton** 教授が担当された。そのころ、彼はちょうど **A.C. Littleton** 教授とともに有名な著作である *An Introduction to Corporate Accounting Standards* を執筆中であった。彼はその初稿を用いて授業を行った。この本は **1940** 年に初版が発行された。歴史的にみて、この本の出版は世界の会計学理論の発展に大きな意義がある。

思えば、**Paton** 教授の学生になったことが会計学という奥深い学問に生涯を捧げるきっかけとなった。これ以前の私は、会計理論とはどんなものであるか、実のところしっかり把握していなかった。**Paton** 教授が提唱した会計学理論は、私のその後の歩みに大きく影響したのであった。

私は自分の一生のなかで安先生と **Paton** 教授に出会い、その教えを乞うたことが何よりも幸せなことであった。その最大のメリットは私の頭の中に種のように会計思想が芽生えたことである。安先生はすでに **1976** 年に亡くなられた。ここに故人を偲びたい。**Paton** 教授は百歳を過ぎてなおご健勝とうかがっている。ご長寿をお祈り申し上げます。

1939 年 **6** 月、私はミシガン大学ビジネス・スクールを卒業し帰国した。私には卒業後もアメリカに残り現地で生活しようといった考えは一切浮かばなかった。帰国前、自分の視野を広げる目的でニューヨークに行き、**1939** 年 **World's Fair** を見学した。その後、サンフランシスコに立ち寄って **Golden Gate International Exposition** を見学し、**7** 月に祖国に帰った。30年代後半、私と同時期にミシガン大学に留学した中国からの学生は3、4百人ぐらいであった。大部分の者は私と同様卒業後、祖国に帰った。もちろん、アメリカ国籍を取得して異国人になった者もいたがその数は少なかった。

4 講壇に立つ

私が上海に帰ってきたとき、上海は陥落し“孤島”になっていた。上商の同窓生である胡君は船着き場まで出迎えにきて、落ち着いたら院長先生のところへ行くよう伝言してくれた。院長に会いに行くと、海外での留學生活について少し尋ねてから、私に母校に帰って教員になるよう言ってくれた。私は母校に対して愛着の念があったので喜んでその申し出を受けて講師になった。

その頃、安教授は母校の会計学部長をされていた。同じ学部の中で教員になった者は、坎際唐、胡宝昌、楊紀荳、屠志甲などがある。安先生は、「学部の主な会計科目は担当者が既に決まっており、その担当者らは私のかつての先生か同期なので追い出すわけにはいかない、とりあえず「企業財務管理」という科目を担当したらどうか」と言ってくれた。この科目の担当は私の理想ではなかったが、会計と近い科目ではあるので不本意ながら受け入れた。そして帰国直後から母国の教壇に立った。

新学期の開始から2週間ほどしたある日、統計を担当している葵正雅教授（当時の工商管理学部長）から学部で保険学を教える先生がいないので担当してほしいとの依頼を受けた。これも断るすべがないので、不本意ながら受け入れることにした。

「企業財務管理」と「保険学」という科目はどちらも一学期科目なので第2学期から新科目として教えることになっていた。当時、私は年も若く血気盛んであった。院長に招聘されて母校に帰ってきたが、会計を教えることができないことに苛立ちを感じていた。自分の得意分野を教えずに、専門外を担当するぐらいならやめた方がいいと考え、1学期だけでやめることにした。

安先生は私の心を十分理解してくれ、1940年の夏休みに話し合いの末、私立光華大学商学院に2年間の予定で世話をしてくれた。そこで私は主として原価会計を、後に高等会計を教えた。授業の手助けをしてくれたのは助手の胡さんで、その後彼は私の畏友になった。

1942年の秋、南京の王精衛かいらい政権は、上海の大学で働く大学教員が登録しなければならぬとの通告を出した。私は漢奸（裏切りもの）を憎み、かいらい政権に登録すれば非合法的なかいらい政権を認めてしまうことになると思い、たとえ教員をやめることになろうとも登録はしないと心に決めた。登録をしていない者は招聘できないので、光華大学は職員を私のもとによこしては何度も登録を勧めた。しかしその都度、私は婉曲にその申し出を断った。

1945年、抗日戦争が日本の敗戦で終結した。その年の12月、上海の各大学は全国各地に散らばっていたので急に復校することが困難であった。そのため、国立上海臨時大学を創立して各大学の学生を集めて授業を再開した。私が上商時代に教わった張惺珊教授は学校側の要請により、臨時大学の商科の責任者をされていた。私は再び教壇に立ち、会計学部の主な科目である、原価会計や監査学、会計制度、会計問題等を教えることとなった。そして半年あまりの期間に1学年の授業任務を終えた。

1946年の夏休みの終わり頃には母校の上商も復校した。私の一年先輩の朱国莪は院長になった。その頃、上海臨時大学は歴史的な使命を終えて解散した。私は教員を続けるにあたって大学を選ぶ必要があった。朱国莪は母校に戻るよう勧めてくれた。一方、臨時大学商科の張惺珊教授は一緒に埕南大学へ行こうと誘ってくれた。考えに考えぬいた末、私は結局母校に戻ることを決めた。上商は私を専任教授として招聘した。その年、私は31才であった。自らの職歴を振り返ってみると、講師から助教授になるのに6年を要し、助教授から教授への昇進には1年を要しただけであった。

母校は、復校してから許本磔教授が会計学部長をされていた。彼は1回生の会計学と4回生の監査論を担当していた。私は会計学部の主な科目の授業をした。たとえば会計学、高等会計、会計制度と会計問題等である。朱国莪も会計学部の出身で、原価会計の授業を担当した。彼は『原価会計理論及び実務』という本を出版してから、代わって企業管理とい

う科目の授業を担当した。1948年から私は原価会計の授業を担当し始めた。当時、上商での助手には李振宇、王美韻、趙素剩、僧克礼などの諸君がいた。彼らは立派に仕事をこなした。王美韻氏は1982年に編集した『会計計算原理』を出版するにあたって、光栄にも私に前書きを依頼した。趙素剩氏は私が中心になって出版した『近代会計ハンドブック』の第三分冊のために第1章の訳稿を担当してくれた。40年代から80年代まで続いた共同作業は、価値のある研究成果を生み出し、今にも忘れられない懐かしい往事である。

私が上商につとめていた頃、大学は何度となく各教授の著作リストを作成し、それを掲示した。ある教授は何冊もの著作をもっていた。私は掲示板の前で慚愧に耐えなかった。私は教授陣の中でも若く学生からも人気があったが、著作がないというのはとても残念なことであった。そこで私は、朱国莪氏の助言を得て、授業の傍らで本を書いた。私の『原価会計学』はこうして授業をベースにして完成されたのであった。1951年、この本を出版するにあたっては当時の新しい素材をたくさん盛り込んだ。例えば、70年代末から80年代までわが国は管理会計を導入した。多くの学生が **break - even analysis** に対して興味を持って会計の新しい方法として勉強したが、実は『原価会計学』という本を出版するとき、既に少し論じていた。

5 工業会計を教える

教育は上部構造の重要な一部分であった。新中国は建国後、社会主義建設の要求に応じて教育に対して徹底的、全面的変更を強いた。教育目標から教育思想、教育内容、教育組織、教育方法にいたるまで従来のやり方を踏襲することは許されなかった。会計教育も教育の一部としてその例外ではなかった。また、会計教育の内容は社会科学に属することから、この点からも激しい変革を迫られることとなった。

私は新中国が建国される以前に34年間をこの国で過ごした。会計教員の一人として、新しい社会の生活に当惑もした。最初に直面した問題は、これからどこへ行くかということであった。中国共産党の指導下で、人民政府は我々のような旧社会からの知識人に対して寛容な政策をとった。自分の意志によって我々はそのまま仕事を続けることが出来た。1949年からの約40年間、私はそのほとんどを会計教育に従事して、その間幾度となく自らの会計教育法に変更を加えながら、わが国の会計学の変遷に加わっていくこととなる。

1950年8月、母校の上商の校名は「国立上海財經学院」（上海財政經濟学院の略称、以下は「上財」と称す）に変わり、華東軍政委員会に所属する財經委員会と高等教育処の両方から指導を受けた。孫冶方は院長の担当で勁耐は副院長の担当であった。私はそのまま会計学部の教授であった。1951年の夏休み、国立上海交通大学管理学院は私立光華大学商学院と同時に上財に統合された。統合した後に、上財は交通大学管理学院の教師陣を集めて財務管理学部を新たに創設した。同時に「上財」の先生と光華の会計を教える教師陣が合流して会計学部を創設した。私は会計学部の教授と副学部長を兼任した。

1952年の秋、「大調整」と呼ばれる大学の統廃合が行われた。上海と華東地区にある大学の商科関連の学部はみんな「上財」に合併された。会計学部が合併された他の大学は、復旦、震旦、大同、之江、立信などの10数カ所以上であった。また、ソ連の教育体制に学んで学部内に会計計算原理、工業会計計算、工業企業経済活動分析と生産技術財務計画などを分けて教研組（学科に近い一訳者）を設立した。その後、私は会計学教授の専任と

工業会計計算教研組主任を約6年間にわたって兼任した。「大調整」後、私は会計学部副学部長を免職された。しかし、**1957**年から再びその職を兼任することとなる。

「大調整」後は、ソ連に学んで学時制という授業計画が実行された。4年制の本科生は授業計画に沿って勉強しなければならなかった。そのほか、2回の生産実習と学年論文を課された。会計学の主な科目の教科書は全てソ連の教科書を採用した。それまでの教科書は全て廃棄された。

上財は昼間部と夜間部があり、4年制の本科と2年制の専科があった。工業会計計算という科目は会計学部の学生のみならず他の学部の学生も履修していた。だから、私を責任者とする教研組は毎学期に各学部のために授業を行った。開講科目数はだいたい30-40程度でとても忙しかった。教科書は主としてソ連のニプラケ教授が書いた『工業会計計算』であった。この本は立信会計図書用品社から出版された翻訳本であった。

工業会計計算教研組はだいたい40人位で、会計学部の各教研組の中では教員数も科目数も規模が一番大きかった。教員のほとんどがロシア語を知らなかったのがその訳本であった。訳本は読みにくく、その要点も理解しにくかった。このような状況下で教研組は教員を組織して週に1回ないし2回集まり、皆で授業の準備をした。例えば講義のやり方とか学生からの疑問点の解答などを準備した。当時、そのようなやり方は必要であったと思う。指定された教科書の翻訳文の読みにくさは教員たちにとってさほどの問題ではなかったが、学生たちには問題であった。そこで、教研組が設立された当初から講義の原稿を補助教材として用いることにした。その原稿はまず私のところに集められて、私が推敲してから印刷へと回された。

講義内容の大枠が出来上がった後、我々は中国の工業企業会計制度に結びつけて、中国の会計実践を講義に盛り込みながらできるだけ理論的に説明を加えた。講義の編集と同時に、若い助手を組織して若干復習用と練習用の演習問題とその模範解答を作成した。

以上のものを授業で試験的に使い、改訂を加えながら次第に完全なものへと作り上げていった。**1956**年、教研組には専門的な教科書編集グループが作られ、『工業会計計算』という本の終稿が書かれた。この本は三冊からなり、教研組編著でそれぞれ上海財政経済出版社から出版された。本の原稿の執筆者は宏清浩、何士芳、周髮困と孫冤生の諸先生であり、復習用と練習用の演習問題の担当者は王松年先生であった。私は統括して前書きの執筆を担当した。

私は**1952**年から**1958**年まで上財で工業会計計算を教えて、教研組の責任者としていろいろな仕事をした。私は『工業会計計算』のために多大な精力を注いだ。この本はソ連会計とソ連会計準則のもとに形成されたわが国の統一的な工業会計制度に対する教研組一同の理解を表わすもので、私たちが新社会で会計授業実践に参加したことの記録でもあった。

その時実行された授業計画によって、会計専攻の主な科目は「工業会計計算」の他に「会計計算原理」と「工業企業経済活動分析」であった。**1958**年、『工業会計計算』を出版するとき、『会計計算原理』と『工業企業経済活動分析』も各教研組によって完成され出版された。この三冊は一セットで系統的な会計学の教科書となった。これは先生方が理論を實踐と結びつけ、ソ連の経験を中国の経済実態に合わせた成果であった。しかし、残念ながらその時上財が解散されて、上海社会科学院が設立された。教員たちの努力と協力の結晶であったこの**3**冊の教科書はあまり使われずに蔵入りされた。

6 脇役を演じる

1958年9月に上財、華東政法学院、復旦大学法律学部と中国科学院上海経済研究所を合併して、上海社会科学院が設置された（以下は「社科院」と略称する）。私は社科院の一員になって、やはり教授、工業会計教研組主任、会計学部副部長の担当であった。社科院が出来たとき、ある上海市政府幹部は次のようなことを言った。「新機構は上海社会科学院となり、教育と科学研究の2つの任務がある。というのは、上海社会科学院という名前の最後の2文字が学院で教育を意味し、最後の3文字が科学院で研究を指しているからである」。しかし実は社科院が出来てから教育面の仕事は次第に減少し、まもなくやめることとなった。

1959年の夏、私は会計学部から社科院の経済研究所に転職した。1960年に上財は復校された。社科院にいる元の上財の教員はほとんど戻った。私も戻りたかった。なぜなら、社科院で会計研究をするのは困難だったからである。しかし、たびたびの申請にも関わらず許可されなかった。勁耐は副院長で今の経済研究所の所長であった。彼は長い間に私の上司で、「あなたが上財へ返してもらえないのは私の決定だ。あなたには経済研究所に残って私のそばで仕事をしてもらいたい」と言った。彼がどうしてこのような考えをもっているのか当時の私には分からなかった。

社科院で私は教授であったが、教える学生はいなかった。私は相次ぎ財政経済会計組、財政金融組と工業経済組の副部長を担当していた。

経済研究所の経済史グループは『榮家企業史料』と『劉鴻生企業史料』という本を2冊編集した。出版に際して勁耐所長は私と統計学の蔣士駒教授に次の仕事を依頼した。これは会計学と統計学の視点から本をもう一度チェックして資料の内容を確認するというものである。私は経済研究所に残って研究活動の協力者として脇役を務めることとなり、ようやく彼の真意を理解した。

その頃、研究所の中では会計には理論がないという見方をもっていた人も少なくなかった。私の会計研究も難しくなっていた。その後、私は経済計算を研究した。経済研究所の学術組（学術グループ）は常にメンバーの研究成果を内部で公開した。私は会計を離れたので研究成果が少なく、かなり焦った。しかし、どうしようもなかった。

私の経済研究所での6年間の仕事でもっとも重要なものは、財政部の要請を受けて『会計原理』の編集に参加することであった。その頃、ちょうど「3年自然災害期」（1958年から干ばつなどの自然災害が立て続けに発生した3年間）の終わり頃で中央政府は「調整、強固、充実、向上」という八字方針を提唱していた。この前の数年間で、会計分野にどんぶり勘定という現象が起こり、帳簿をつけないことさえあった。50年代中頃から作られたわが国の統一会計制度が破壊された。会計教育も無駄な回り道をした。財政部はこのような状態を立て直すために『会計原理』の編集に乗りだした。これは根本的に会計秩序を回復する重大措置の一つであった。財政部は全国の大学から4人を指名し編集班を作った。財政部副部長の呉波は我々の4人を「翰林院編集者」というニックネームをつけた。4人は中国人民大学の趙玉民、話門大学の乞家鬻と上海財經学院の呉誠之と私であった。私はただ一人、大学からではなく上海社科院からであった。我々の4人は北京に集合して4ヶ月で基礎的な教科書を編集した。教科書は9章からなり約24万字であった。初稿が完成

した後、会計制度司（中国財政部の会計制度局一訳者）の楊紀荳が編集した。1963年5月に編集グループ編著という形で出版された。この本は出版されてから20年間に16回の増刷を重ね、発行量は100万冊以上にもものぼった。長い間にわたってこの本は影響を与えつづける会計授業の基礎的な教科書であった。1988年に元の著者は書き直して、修正版を出版した。

私は『会計原理』の冒頭で会計の二重性を論じた。つまり会計には階級性があると同時に技術性もある。「会計は階級性をもつ」という見方が何十年以上も中国の会計学を支配する状況の下で、「二重性」を提起するにはかなり勇気が必要であった。財政部の後ろ盾がなければ、そして4人のティーム・ワークがなければ、このような重大な理論的な突破を実現することが出来なかったに違いない。そのほか『会計原理』は会計が3つの内容から構成する観点を提起した。その3つの部分は会計計算、会計分析と会計監査である。

しかしこの本は一つの枠を突破することが出来なかった。その枠は50年代からわが国に幅広く流行していたソ連のマカロフ教授の『会計原理』であった。

『会計原理』を編集するとき、私は会計学の中でいくつか重要な問題を発見した。これらの問題をまだ理論的に十分整理していなかったが、経済研究所に戻ってから、一つずつ研究して次々文章を書いて論じようと思った。しかし、その後、他の仕事ははいつたため、書き上げた論文は共著の「口座の本質と口座の分類に関する試論」だけであった。今もこのことを振り返り残念に思う。

7 本業に復帰する

「文化大革命」の動乱期に私は迫害を受けた。幹部学校（普通は「干校」と略称する）に行かされて農作業などをした。その後、夏の高温期に工場へ行かされて“高温との戦い”という名目で労働させられた。しかし“高温（工場）”から“低温（農村）”へ、また“低温”から“高温”へと11年間もあちこちに移動させられた。その間、私は何度も自分に適する仕事をしたいという要求を提出したが、許可されなかった。その時期は私にとって一番たいへんな時期であった。

1978年のはじめに、「文化大革命」の終結に伴って知識人の名誉回復と職場復帰が行われた。私は「どこで仕事をしたいか」と上海の関係部門に聞かれた。当時、上財と社科院はまだ復校していなかったから、私は復旦大学を選んだ。その後、2年間ぐらい復旦にいた。1年目は経済学部にも所属したが授業はなかった。翌年、成立したばかりの管理科学学部で卒業生に「会計原理」を教えた。この科目の総コマ数は36コマしかなかった。会計基礎知識を教えるだけで私は準備しなくても大丈夫だった。

10数年ぶりに教育現場に戻ってとにかく嬉しかった。私は授業の他に仕事があれば何でも喜んでやった。長い間会計専攻を離れたため、最初の1年間では会計以外の仕事をした。学部の工業経済グループは授業用の海外資料が必要なために、私を翻訳組のメンバーに加えた。私は外国の資料を翻訳して紹介した。例えば、「ゼロ予算」、「労働者の管理参加」などであった。1978年7月に私は上海科技文献出版社の招請で李氈世教授と張訓達先生と一緒に『品質管理ハンドブック』前半の翻訳稿を編纂した。最初の翻訳稿はたくさんの人によって翻訳されたので、訳し直す必要があった。また、編纂は最終の作業なのでその任務は重かった。我々は3人で8ヶ月をかけてようやく完成させた。私は本の48章の中で

12章（約35万字）を編纂した。この本は建国30周年記念のプロジェクトで、1979年11月に出版された。

私は『品質管理ハンドブック』を編纂することによって、TQCに関する理論を吸収し、守備範囲がぐっと広がった。私の書いた「原価計算準則試論」という論文には品質管理とコストとの関係についての論述があったのはまさにそのおかげであった。

教育と研究に復帰してから、私は会計以外の仕事からだんだん会計と関係のある仕事に移行した。1979年『辞海』（1979年版）の経済学部門にある会計学の項目を編纂する際、私は上海辞書出版社の招請で宏清浩教授と一緒に責任者になった。この本は1979年に出版された。これも建国30周年記念のプロジェクトとなった。

1980年、私は中国会計学会の成立大会に参加した。大会の開催に際して私は「原価計算準則試論」という論文を大会に提出した。大会で私は理事と副秘書長に選ばれた。

私は中国会計学会の呼びかけを受けて、北京と上海などの会計学教授と一緒に『近代会計ハンドブック』を翻訳し始めた。楊紀荳教授は編集長であるが、私は総校正と総審査であった。本を7冊に分けて1冊ずつ出版する計画であった。1982年8月に第1分冊を出版して今まで第2、3、4、6分冊も出版された。まだ2冊があるから引き続き頑張りたいと思う。

「文化大革命」期に解散された上財は、1978年に勁耐院長の下で復校された。勁耐は私の長い間の上司であった。彼は私に対して母校で仕事をしようと招請した。私も上財に戻りたかった。母校へ帰れば会計に戻れるからであった。復旦に残れば毎年会計原理を教えるだけで暇は持て余すほどであった。しかし上財に戻れば忙しくなることが明らかであった。復旦の指導層の幹部は、復旦に残る方がいいと勧めてくれた。私は両方を比べて、上財へ帰ることは自縄自縛であるが、自分の好きな道なので許してくださいといった。

その後、両校は相談して問題を解決した。1980年4月に私は母校に帰った。1958年からの21年間、私は社科院→「文化大革命」→復旦を経てもう一度1958年に在籍していた上財に帰った。大きな回り道を経て出発点に戻った。かつて私が迎え入れた諸先生方は、1980年には私を迎え入れてくれた。そのとき、「人生にはよくこのような流転輪廻があるかな」と感慨無量であった。

1980年4月、私は上財に着任し、9月に会計学部長となった。1984年12月から石成岳教授は学部長を担当し、私は代わって名誉学部長となった。この名誉職は今日にまで続いている。この十数年間、私は全力で仕事をした。日曜日も祝日も全て仕事に費やした。冬休みや夏休みも仕事に明け暮れた。復旦を離れたときにいわれた“自縄自縛”は確かに本当であった。しかし、この10年は私の一番忙しい年月で、体力の消耗も学術成果も一番多い時期であった。だからこの10年間は苦労というよりも嬉々として仕事に取り組んだ10年間といえる。

どうして自縄自縛が楽しみといえるのか。それは一時期私が仕事を剥奪されていたからである。暗黒の時代に専門領域の仕事が一切出来なかったのでつらかった。だからいったん仕事を与えられ、長年従事した会計教育に戻り、良い環境にも恵まれると、非常に幸せな感じをし、仕事をする権利を従来以上にありがたく思えた。

知識人に対する政策のあり方で一番重要なことは、その人間を信頼して専門分野で自由に仕事をさせてやることだと思う。

8 国際論壇に登る

80年代の初頭に始まったわが国の対外開放政策の実施に伴って、私は国際論壇にのびた。これは新中国が成立以来考えられなかったことである。もちろんそのようなことは「文化大革命」時代ではなおさら夢のまた夢であった。

私は1980年の始めにまだ復旦大学にいた時、財政部は **Coopers. & Lybrand** と協力して第1期「中外合作企業会計講習班」を行うことを決めた。**Coopers. & Lybrand** は世界で有名な8大（今は6大）財務会計コンサルティング会社の一つである。講習班を行う場所は上財であった。班主任は中米両方の一人ずつの担当であった。勁院長は財政部の意見をも諮って中国側の班主任を私に任命した。私は復旦にいながら上財に恋心を持つ私は、これを転機と思って喜んで引き受けた。第1回の中米間の北京会談に私は一つの案を提出した。この案は以下の通りであった。講座を2段階に分けて、第1段階では中国側の教授が10週間で全国から集まった受講者たちに西洋の財務会計を授業する。第2段階では6週間でアメリカの講師が現代財務会計の重要な内容を教える。会談の時、私は第1段階の授業内容を紹介して、中国側の教授がどの程度西洋の会計を理解できるかを示した。私の案はアメリカ側に受け入れられた。第1段階の内容にも賛成してくれた。秋の涼しい時期をアメリカ講師に当て、中国側の授業は6月15日から8月末までとした。中国側の教授は3人であった。私は5週間で、宏清浩教授は（監査論担当）2週間で、また王桐清教授は3週間であった。その時期の上海の天気は蒸し暑く、朝から昼まで汗だくになって授業した。

アメリカ講師団が上海にきてからは私が接待を担当した。毎日受講者と一緒に講義を聴いた。問題がでたらすぐに解決した。アメリカ側の班主任は **Raderick Macleod** である。彼は私を中国文化、中国知識人の模範として友好的に付き合ってくれた。

私は講習班を準備するとき、西洋の中級会計のよい教科書を参考にして授業の要綱を作った。終わった後、王娉如、銭嘉福先生と共同で『資本主義企業財務会計』を編纂して、1984年9月に出版した。

1982年3月から中国側は当時8大会計会社の一社であった **Touche Ross Co.** と共同で第2期「中外合併企業会計監査講習班」を行った。私も班主任の担当であり、學員に基礎理論の部分を教えた。

そのほか、国連の援助を受けて、学校は「管理会計研究班」組織した。私は班主任を担当した。私はアメリカのミネソタ大学の **Jack Gray** 教授を招聘して、わが国の管理会計の応用を促進した。

1983年12月、中国政府の監査署（会計監査院相当）は国連の援助のもとで、上海で「工業監査育成班」を行った。私はその任に当てられ育成班を組織した。そして再び **Coopers & Lybrand** の **Raderick Macleod** の協力を得た。**Raderick Macleod** 社は講師団を派遣してくれた。

第1期の中外合作企業会計講習班が終わってまもなく、財政部は学校を經由して私に任務を伝達した。これは中国会計学会と中国財政学会の名目で私を主として一つの研究班を結成し、UCLAと共同で中米比較会計を研究するというものであった。アメリカ側の研究グループは教授、会計士と大学院生たちであった。中国側もこれにあわせて同じ形で組

織した。研究グループは4人からなり私が主任を務めた。他の3人は石成岳副教授（現教授、上海財經大会計学部部長）、豎静之総会計士（上海塗料工業公司、現高級会計士、上海市計画委員会副主任、上海市物価局局長）、鴻正権大学院院生（現副教授、上海財經大会計学部副主任）であった。アメリカと会計分野の共同研究は前例がないので、成功させるために研究組全員は休みなしで準備にとりかかった。

1981年3月に私は中国側の研究グループを率いてロサンゼルスを訪れた。期間は8週間であった。前もって十分に準備していたので、心の中でほっとした。我々が持参したのは(1)我々が書き上げた中米比較会計要綱（6章）、(2)比較会計初稿の第1章の総論、(3)共同研究の方法と目標に関する提案、(4)会計日常用語の比較、(5)アメリカ側に贈呈したい交流資料であった。80年代の始め、わが国の会計に関する公開出版物がそんな多くなかったので、交流資料を探すことはとても困難であった。

1981年前半期の第1回の会談では中国側の提供した要綱が同意された。中米で各3章ずつ担当することになった。共同研究では、専門用語について共通的な認識を持つことが重要であった。そこで共同研究の一環として会計学語彙辞典を編集することになった。

1981年11月に **Mr. John B. Farrell** を始めとするアメリカ研究グループは上海を訪れた。期間は3週間であった。その間には現場の見学も盛り込んだ。例えば工場や百貨店、会計事務所の見学である。その他の時間は管理会計比較と監査比較という2章を討論した。

1983年4月に香港で第3回の討論が始まった。期間は3週間であった。会談の内容は中国側の1、2、4、5、6章とアメリカ側の1、2章であった。論議の時、具体的な問題で相互一致をはかるのはとても難しいことだと痛感した。これはアメリカ側も同じ思いだったと思う。両国共同で1冊の本を書くのはとても難しいことだった。

第4回目の会談は上海で行われた。期間は1週間だけであった。アメリカ側の出席者は2人だけで、共同研究の前途は暗くなってきた。

最初の話では両国の共同プロジェクトだが実際は中国側が主として編集した『英漢・漢英会計辞典』は香港での討論を経て最終的に私が編集して出版された。1985年8月に国内版と国際版は同時出版された。香港三聯書店は国際版を1985年のフランクフルトの出版物博覧会に展示した。

中米比較会計という共同研究の開始以来、中国側は次々と共編著の形で研究報告を発表した。『会計研究』という雑誌で発表したのは「会計に対する社会経済制度の影響」と「会計と社会の関係」などである。『財務と会計』という雑誌で「中米比較会計略論」というレポートを発表した。日本学者隈井要先生は「中米比較会計略論」を日本語に訳して日本の『中国経済』という雑誌に発表した。その後、隈井要先生はこの論文を自身の著書『中国会計』という本の1章に掲載した。

もう一つの重大な国際共同研究プロジェクトは、英文で『中華人民共和国の会計と監査』(**Accounting and Auditing in the People's Republic of China**)という本を書いたことである。このプロジェクトは、UTD国際会計開発センターのセンター長 **Prof. Adolf J. H. Enthoren** の提案のもとで両方が参加したものである。1985年 **Enthoren** 教授は通りすがりに我が学院を訪ねて学術講演をした。私は彼のご来訪を接待した。彼はわが学部に近い印象を持ち、帰国後共同研究を提案した。

中国側の研究グループは私と王松年教授を始めとして組織された。1986年2月に両方に

決められた要綱に沿って我々は一部の若い教員たちをもグループに入れて研究に参加させた。英文で書くのは困難なことではあるが、私は私の指導した院生を大胆に書くよう励ました。書き上げたものについては私がチェックと修正を加えた。これはなかなか効果のある育成方法であった。

約1年間の努力によって10章以上の本の初稿と再稿も完成した。共同研究の中で **Enthoren** 教授は外国読者としての視点から、中国会計と監査に関する問題を出し、我々はその解答に努めた。

1987年3月、**Enthoren** 教授はもう一度来訪し、我々と2週間の日程で審査、修正を加え、仕事の効率はとても高かった。**Enthoren** 教授も最後の1章を書いた。本は全部3編、13章から成る。3月に最終稿が決定された後アメリカへ持ってかえられ、7月にUTDで開催されるアメリカ会計学会1987年大会の資料として使われた。この本はわが国の会計に関する本の中で一番先に国際論壇にでた本であり、アメリカ、日本、インド、パキスタンなどの学者にも注目された。日本中央新光監査法人は我々と相談して本を全て日本語に翻訳して中央経済社から出版した。

近年来、私の国際学術論壇に登るもう一つの道は国際会議に参加することである。1983年と1984年、私は2回にわたってわが国の政府代表の担当を任命されて、第1回と第2回の国連の「国際会計とディスクロージャーに関する政府間専門者会議」に参加した。会議に参加した後に財政部と対外経済貿易部に報告書を提出したほかに、私は論文を書いて感想と動向をわが国の学術界に紹介した。

国連のこのような専門家会議は開催前に資料が用意され、代表に配布される。私は初めてこのような会議に出席した時、昔の記録を探すことができなかつたので、まじめにこれらの資料を読んで発言原稿を書いた。議題内容は私にとって馴染みのあるものであったので、発言稿を書くことは難しくなかつた。

会議に参加する各国、各地区、各団体の代表は30人位であった。私は「中国」という標識のある座席に着席するときとても興奮して、誇りにも思った。私のここでの発言は10億人以上の中国人民の声を代表するものであり、真剣に対処しなければならないと思った。質問に対する的確な答弁で中国人民の智慧を示し、祖国のために榮譽を勝ち取らなければならないと思った。

国際会議に参加するとき発言権をうまく利用しなければならない。しかし発言の内容が正確でなければならない。会議期間中、会計分野の問題や一般的問題に対して私は全てこの原則で対処した。

国際会計とディスクロージャー準則に関する会議ではあるが、答えなければならない問題は中国には会計準則があるかという問題である。私の答えは「ある」であった。わが国の統一会計制度の中には会計準則が含まれている。しかし、文書としてはまだ制定途中であった。文書としての会計準則をもって各国の代表と交流するのが私の夢であった。

各国の代表はわが国の会計については分からないところが多いという。個人間での話し合いの際、ある人は「中国は貸借記帳を実施しているか」という質問を出した。このような問題について、私は丁寧に説明した。外国代表が分からないという原因の一つにはわが国が国際社会に向けての説明を怠っているということがあると思う。だから今後わが国の会計学会はこの面での責任を担わなければならないと思う。

1987年10月第六回会計国際教育国際シンポジウムが日本の京都で行われた。私は招聘されて出席した。Enthoren 教授の紹介で私はたくさんの日本及び東南アジア諸国の関係者と友人になった。Enthoren 教授は我々が共著した『中華人民共和国の会計と監査』という本を推薦して影響を拡大した。

私は大会へ英文で書いた「中国会計教育の特徴と問題」という論文を提出した。私は要点のみ発言して主に質問に答えた。論文の終わりの部分で私は「教えながら人を育てる」という見方を強調した。この見方は参加者に賛同された。会議後、ある代表は論文をもらいにきた。ある代表は私と意見を交換した。

京都會議の時、私の国際友人は増えた。その後、私はオーストラリアのシドニー大学主催の国際会議に参加するよう招請状を受けた。そのほかにパキスタンからの講演依頼も受けた。国際交流のいいチャンスではあるが、病気のため遠回しにお断りした。

京都會議の後、私はお招きによって東京の一橋大学で「経済体制改革と会計変革」というテーマで報告した。一橋大学の会計教授に郑重にもてなしてもらった。

1989年9月、国連の多国籍企業センターはモスクワで「計画経済国家の経済特区に関する国際シンポジウム」を開催した。会議は私を国際専門家の身分で招待してくれた。私の役割はわが国の経済特区会計の経験を紹介するというものであった。新中国成立後、ソ連の会計専門家が中国に会計知識を教えて、わが国への会計事業の発展に対する影響は大きかった。しかし、中国の会計教授がソ連の論壇に立つのは前代未聞のことであった。だから、私は是非とも行かなければならぬと思って、病氣中にもかかわらず快く引き受けた。上海財経大学副学長の王松年教授も招請されていた。私は英文で「中国経済特区会計の経験」というテーマで報告した。この論文は後に国連の編集した1991年出版の『中央ヨーロッパと東ヨーロッパの直面する経済特区の挑戦』(The Challenge of Free Economic Zones in Central and Eastern Europe)という本の1章として収録された。私も王松年教授と一緒に国連の招きでモスクワ国民経済学院に会計育成班の討論に参加した。私はソ連の教授陣にわが大学で行った中外合作企業会計講習班の授業計画と経験を紹介した。

私は何度も国際論壇に立った。私はわが国の会計学者にはこのようなチャンスがまだまだ少ないと思っている。交流が多くなることはわが国の会計研究にも寄与すると思う。

9 授業改革を断行する

私が上財に戻ってから、会計学部長として一番重要な仕事は授業改革を行うことであった。授業改革を行う発想は私一人の考えではなく、教員全体の考えによるものであった。その頃の中国では社会主義近代化の建設は全国的な要求となっていた。復校してからどのように授業の質を高め、どういう風に四つの近代化に適する会計専門家を育成するかは緊急の課題となった。

私は学部内の先生とはほとんど長い間の同僚であり、お互いに理解しやすい関係であった。我々は授業改革指導本部を成立して授業改革の案を出した。授業改革は院長と財政部からも支持されていた。授業改革は次のいくつかの重要なことについて行われた。

(1) 授業計画。もとの授業計画は理論と実践の結合を重視し、実践の方を強調した。これ

は長所であり、残しておかなければならない。他方、適応力の高いゼネラリストを育成するために、工業会計学科と商業会計学科を統廃合し会計学学科を設置した。同時に学時制を廃止し単位制を導入することを通じて、授業内容の弾力性と学生の勉強意欲を高めた。

- (2) 科目体系。長い間実行されてきた3つの科目を廃止して、新しい科目体系を打ち立てた。新体系は基礎会計、財務会計、原価会計、管理会計および監査という科目を中核科目にした。また、他の会計学科の科目と併せて国際的な潮流にあう科目体系にした。
- (3) 教科書。古い教科書を廃棄して、学部内の先生たちが自ら編集した新しい教科書を採用した。
- (4) 授業方法。教室で先生が一人で教える方法を廃止してもっと啓発的方法を使った。そのまま教科書に沿って教える方法を廃止して、重点的に分析しながら教える方法を使った。

以上のような授業改革によって、仕事がたくさん増えた。とりわけ中核科目の教科書の編集はとても労力の要る作業であった。今、5つの中核科目の新しい教科書は既に完成し、一セットで出版された。その他の教科書もそろそろ完成する段取りになっている。

5つの中核的な科目の新しい教科書の中で、私が編集長になったのは次の3つであった。

『基礎会計』1984年12月出版。

『財務会計』（上、下）それぞれ1986年8月と1987年3月出版。

『監査学概論』1987年5月出版。第一刷発行後、何度も増刷を重ね全部で69.8万冊を印刷した。

私が編集長になった教科書を編集する際、「会計の本質は管理であり、会計は管理活動の一環である」という見方を示した。会計は技術的側面からいえば、事前的予算編成、実行中のコントロールと事後的記述からなっており、内容からいえば、賃金とコストの2つからなっている。財務会計の中心は、占用資金を節約し資産の生産性を高めることにある。原価管理と管理会計の中心は原価をコントロールし、労働と原材料の消耗を節約することにある。

私が上財に戻ってからのもう一つの重要な仕事は大学院院生の育成であった。1982年から会計を専攻する修士課程の院生を、1984年からは博士課程の院生を育成し始めた。院生を育成するために私は多大な力を注いだ。

私が会計を専攻する修士及び博士課程の院生を育成したのは偶然の選択ではなかった。私はかつてわが国の会計理論及び構成内容を考えた。1980年、私は石成岳教授との共著で私の考えを論文として発表した。この論文のテーマは「わが国の会計理論体系の構築に関する一試案」である。この論文は1981年の年初に『上海会計』という雑誌の創刊号に発表された。この論文には会計理論体系の構築に関する提言とその理由が盛り込まれ、会計理論体系の意味とわが国の会計理論体系の特徴も示された。論文を発表した後に、その提案の具体的内容について次々と項目別に論文を発表しようと思った。しかし、

その後忙しくなって計画通りに論文を書くことが出来なかった。近年少しずつまた論文を書きはじめたが、最初の計画にはほど遠いものとなっている。なお、この十数年来、わが国の会計は経済の発展に伴って重大な変化が見られた。10年前に我々の熟考した提案が時代に合わなくなったところもあるので、今後新しい視点からもう一度考えなおす必要も感じている。

1981年、国务院学位委員会が博士課程指導教授の資格を審査する時、上財会計学部の教授は少なくなかったが、申し込みをしたものはなかった。1981年の後半になって、私の友人が「先生は申請しなかったのに学位委員会から博士課程指導教授の資格を認可されたよ」という情報を教えてくれた。私はこれを聞いて感動すると同時に心配になった。この種の指導は今までやったことがないので、自分ができるかどうか分からなかったからである。私は1984年から博士課程の院生を指導し始めた。

今まで、私は7年にわたって計13人の博士院生を指導した。そのうち学位取得者が3人で、海外で引き続き研究をしているものが3人で、在学しているものが5人である。博士課程院生の育成には高いレベルの研究水準と厳しい要求が必要であると私は一貫した主張している。

私は会計授業改革を実践して、1988年に基本的に予定通りの目標を実現した。即ち、授業改革を通して会計学部に新風を入れ教育の質を高めたということである。具体的にいえば、教科書の全面的書き換え、研究の深化、院生と若い教員の育成と年配教授陣の知識更新などがその主な内容であった。

今までの十数年来、私はずっと会計関連の学会や団体の仕事をした。上述したように私は中国会計学会が成立してからその運営にかかわってきた。1983年、1987年と1992年の学会理事改選のときに、私はそれぞれ理事、常務理事、副会長に選ばれた。

1983年中国会計学会は上海辞書出版社経済大辞典編集委員会から要請を受けて大辞典の『会計巻』を編集した。学会はこの仕事のために楊紀莛教授と私を編者として指名し、十数名の専門家と教授を招集して『会計巻』編集委員会を組織した。『会計巻』は90万字に及び6年間かかって1991年に出版された。執筆者は会計学に対する造詣の深い専門家85名であった。この編纂はわが国の会計学会において最大規模の共同作業であった。

1987年、中国会計学会は研究活動を深めるために8つの専門的な研究グループを結成した。私は「会計基本理論と会計準則研究グループ」の班長であり、乞家鬻教授と冰達五教授は副班長であった。1989年、研究組は上海の金山で「会計準則シンポジウム」を開催した。私は司会を担当した。私は張為国副教授と共著で「わが国の会計理論と会計準則に関する研究と実践」という論文を報告した。このシンポジウムはわが国の会計準則の制定に大きな影響を与えた。

1991年に研究グループは物価変動会計をテーマとして上海で第2回の専門家参加のシンポジウムを開いた。私はこのときも司会を担当した。論文は全部で40本ぐらいあった。私も張為国副教授と連名で「物価変動会計の基礎理論とモデル選択」というテーマで報告した。

以上の2回のシンポジウムは主として上財の若者と私が協力して開催したものであった。彼らは立派に仕事をこなしてシンポジウムを成功に導いてくれた。

私は監査署に委託されて編集長として『監査論概論』をも編集した。まもなく、中国監査学会は成立した。成立大会で私は『生産性向上のための監査』というテーマで学術報告をした。同時に私は中国監査学会理事、常務理事と副会長にも選ばれて、今日にまで担当している。

そのほか、私は中国原価研究会、中国内部監査学会と中国C P A協会に招聘されて、顧問を担当している。また、上海市会計学会、上海市監査学会、上海市原価研究会と上海市C P A協会の顧問も担当している。

私の教育と研究に関するいろいろな仕事が認められて何度も表彰された。1983年と1986年の2回、上海財經学院の先進工作者（優秀教育者に近い）として表彰を受けた。1987年の教師節には、上海市の優秀教育工作者として表彰された。1989年の教師節には財政部教育司から先進教育工作者の表彰を授かり、このことは全国の財政部門に通達された。

私を主宰した会計学の授業改革は上財 1988年校級（大学レベル）授業成果特等賞を受けた。また、1989年に国家教育委員会から1989年度大学授業成果国家級優秀賞をいただいた。1991年10月、国務院は私に「高等教育事業特別貢献賞」を授与し、特別手当まで支給してくれた。身に余るほど光栄に思っている。この一連の表彰は私にとってさらなる研究の鞭撻になった。

私は会計を勉強して、会計を教え、会計を研究してきたこれまでの何十年の間で今が一番いい時であると思う。会計授業改革と研究には際限というものがない。私はより多くの仕事をしたいと思っている。同時に年をとり、身体も弱くなったことも事実である。しかし、自分の力不足が感じられるとしても、若い教員たちが成長し、後継者として会計研究の分野で活躍しているのを見て、一生を賭けてきた会計研究の実が花を咲かせているかなと実感し、今後の発展を楽しみにしているところである。

（『経営研究』第49巻第3号、1998年11月）

補遺 I 上海学術交流帰国後の報告会資料

上海学術交流記 1997, 3/24-4/3

石川純治 1997, 4/5

[I] 学術、教育

1) 婁先生(prof. Lou)との出会い(4/1)

中国会計学界の大立役者。1930年代にアメリカ留学。井尻作品（2冊）の翻訳者。
82歳、パーキンソン病にもかかわらずご自宅で会っていただく。感激、謝辞。

2) 復旦大学の管理学院会計学部長、張(prof. Zhang)先生との面談(4/1)

教育組織・カリキュラム体系はアメリカMBAなみ

コンピューター・ルームは 50 台以上（市大商学部は見劣り）

- 3) 上海財經大学で学部学生(50 人ほど)に話をする(3/25)
話の内容…国際会計基準の動向と中国・日本の会計制度の改革
会計学スタッフは 50 人以上、イギリス・カナダの CPA コースが充実

[II] その他

- 1) 黄山への難行苦行の旅(3/27-31)
14 時間の夜行寝台列車…スピードがきわめて遅い、1 ボックス左右 3 段ベッド（計 6 人）、早朝 6:30 の突然の音楽テープのボリューム
黄山麓の菜の花…素朴でその美しさがたいへん印象的、
菜の花が大変好きな司馬遼太郎を想う
- 2) 魯迅記念館、日本人租界地の跡、上海博物館(4/2)
魯迅の生涯と 1920, 30 年代の中国…革命前の中国
昨年 12 月新装オープンした博物館…歴史のスケールの（日本との）違いに圧倒
- 3) 株式投資と拝金主義
資本主義システム導入の「光と影」（必要悪？）
- 4) 月給、物価について
月給は平均 1,000-1,500 元(¥14,000-¥21,000)、私の朝食代は約 8 元(¥112)
車は日本よりかなり高価、タクシー代…ダウンタウンまで 20,30 分で 20 元(¥280)
5 つ星ホテルのまぐろ刺身が 570 元(¥7,980)…現代の快適でしかし高価な“租界地”

補遺Ⅱ 婁先生との対談記（4月1日）

復旦大学の張(prof. Zhang)教授（管理学院会計学部長）との 2 時間ばかりの面談のさい、婁先生の話をする。張教授は自分の本棚から 1 冊の自分の著作を取り出し、私に見せてくれる。その裏表紙にある写真で初めて婁先生の姿を見た。教授はその 1 冊を献呈しますと言われ、さらに婁先生の自宅に電話し始めた。これがあとで婁先生のご自宅に伺うことにつながる。

タクシーで焦(prof. Jiao)副教授（復旦大学）とバンドに近い婁先生のアパートに向かう。どんな先生だろう、もうかなりのお年のはずだが、話ができるだろうか、…。高層アパートのみように薄暗い 1 階で旧式のエレベーターにのる。そして、初めてみる上海のアパートの玄関口に立つ。応接間に通される。しばらくして、車椅子に座ってしきりに足をふるわせている老人が、お孫さんと思われる若い娘さんに付き添われて現れる。これが最初にみた歴史的人物、婁先生の姿であった。

応接間で待っていた我々二人は立ち上がり、私が妻先生の手を握ると、私の手をしばらくの間離さず握っておられた。これには感激。Thank you, Thank youと言われる。私が英語で自己紹介すると、妻先生は流ちょうな英語で話し始める。つられて私も拙い英語で。足だけでなく、手、そして顔も左右にはげしくゆれているが（パーキンソン病）、頭脳はしっかりしておられる。読むことはできるが、手がふるえているので書くことが難しいとのこと。それでも今なお仕事をされておられるとのことだ。お年は、82歳。およそ半時間の面談中、ずっとお孫さん（コンピュータ・サイエンス専攻の学生とのこと）が付き添う。どこか、井尻先生に似たアトモスファーを感じる。お人柄か。20年前、1977年に京都で井尻先生とお会いしたと懐かしくお話しされる。

私が、「井尻理論のどこにアトラクティブなものを感じますか」と質問する。すると、「理論と実務とのブリッジ」だと言われる。明解なお答えである。最後に、自作の著書にサインされ、その著書をいただく（その様子が最初の写真である）。感激の連続。このあとで、この著作のなかの「私が歩んだ道」を焦さんが翻訳してくれることを約束してくれる。大学の紀要に掲載しようと思う。妻先生のごことは日本の研究者にほとんど知られていないから。

この妻先生をお会いできたことが、今回の上海学術交流の最大のイベントになった。今回の出会いに感無量。